

九州最後の炭鉱として2001年11月まで42年間、操業を続けた長崎市池島町の池島炭鉱。かつて日本の近代化を支えた石炭産業の地は、同市外海地区の沖合約7キロに浮かぶ。周囲4キロの池島を舞台に、島民同士や親子の絆を描いた映画「池島譚歌(たんか)」は6月、同市内を皮切りに公開が始まる。荻野欣士郎監督(43)は東京都出身。映画への思いを聞いた。

「池島譚歌を撮ろうと思ったきっかけは。

以前、東京電力の原発のPR映画を撮った経験がある。そのときは若かったし仕事欲しかったから。福島第一原発事故が起きて、

## 映画「池島譚歌」

### 荻野監督インタビュー



映画「池島譚歌」に込めた思いなどを語る荻野監督  
—長崎市出島町

# 子ども時代思い出して

何も考えずに原発の安全をうたったことをすく後悔した。エネルギーについて深く考えたとき、石炭に思いが至り、池島を知った。しかし、そんなことをすっ

かり忘れてしまうほどの自然や人間の素晴らしさが池島にはあった。  
—池島の魅力は。どこまでも優しい。人も土地も。最初、島の人たち

に距離を感じたが、打ち解けたとき、大きな家に入れた感覚があった。  
—撮影での苦労は。炭鉱跡の立ち入り禁止区域での撮影は大変だった。

人生は一人で歩んでいるのではなく、みんなでつながりながら歩んでいることを表現したかった。  
—映画で何を伝えたいか。

映画を通じて、子ども時代の「秘密基地」や冒険、古里を思い出してほしい。そして私たちがいかに池島に感謝しているかを伝えたい。映画は池島へのラブレット—と語っている。

—ラストシーンでは異例の長さ15分のレール撮影に挑戦した。  
(聞き手は報道部・前田敏宏)

レールは撮影用の5000メートルと手作りの2000メートルと、足りない分は後ろのレールを前につなぎ合わせながら撮影した。映画のテーマは命のつながりや絆。  
映画「池島譚歌」は6月1日から、同市尾上町のアミューズプラザ長崎4階、ユナイテッド・シネマ長崎で公開。順次、福岡でも上映される。